

朝日歌壇 俳壇



〈アオモジIV〉 日高理恵子

◆高山れおな選

- 雁風呂や星の高さへ立つ煙 (静岡市) 松村 史基
- メビウスの帯の散歩や山笑ふ (福岡市) 釋 颯
- 綿虫を撫む人あり撫むなよ (国東市) 斎藤 典子
- 兔飼仕掛け鉄砲風呂に入る (柏市) 渡部 和秋
- 雪しずり防人の妻侍ちし野に (町田市) 吉野 和子
- 堅雪に声転がして通字子 (羽村市) 鈴木さゆり
- 苗札に鏡文字あり伸びよ伸びよ (宮崎市) 山野 楓子
- 春雨の肌かがやくや少女像 (春日部市) 池田 桐人
- 水餅の終の一つを厚餡とす (長崎市) 徳永 桂子
- 佐保姫は宇宙の女神なんとなく (川崎市) 杵淵 有邦

【評】松村さん。「星の高さへ」の詩情が、雁風呂の語が帯びる哀感を際立たせる。釋さん。表が裏に、裏が表に。深まる春の道を行く無限の散歩。斎藤さん。撫む行為も、撫むなよという内心の声も何やら夢幻のような気遣いで、そこが魅力。

◆小林貴子選

- 白木蓮やがて船出のごとく散る (川越市) 大野有之介
- 一本に俳人ひとりつつ梅見 (藤岡市) 飯塚 柚花
- ゴジラ来るやうな音立て春一番 (丹波市) 木内 龍山
- 人生に時々悪路春寒し (村上市) 鈴木 正芳
- 能登の地震海苔掻く岩場隆起して (三木市) 内田 幸子
- 独裁のなんでもありの寒さかな (福島県伊達市) 佐藤 茂
- 近づけば歎き聞こゆる涅槃の日 (高槻市) 黒田 豊子
- 風花や天の飾の美しく (苫小牧市) 齊藤まさし
- ナワリヌイの獄死に偲ぶ多喜一の忌 (三木市) 矢野 善信
- 嗚呼あれはソドムとゴモラ海市立っ (川越市) 益子さとし

【評】一句目、木蓮の花びらは舟形なので、こう詠われると散ることに未来が感じられる。二句目、互いに邪魔しないよう、句作にふける俳人。三句目、春一番がゴジラの鳴き声とは、確かに！ 四句目、悪路もあるが頑張って乗り越えよう。

◆長谷川權選

- 俳壇の全句歌壇の全首花 (大船渡市) 桃 心地
- 春愁やひとりひとつとつ孤独 (甲府市) 中村 彰
- 亀鳴くを待ちつつ田螺うとうと (高槻市) 山岡 猛
- 桜餅食べて終はりぬ税申告 (大野城市) 北原あかね
- 春疾風率一斉に逆さまに (伊丹市) 保理江順子
- 無残やな春なき国の二年間 (松江市) 寺本 章
- 轟々と余寒の水を那智の瀧 (埼玉県宮代町) 鈴木 清三
- おたまじやくし太陽燦爛と (神戸市) 豊原 清明
- 水温む永久に一途な熊野川 (新宮市) 中西 洋
- 酒強き友はみな死に春の星 (長崎県小値賀町) 中上庄一郎

【評】一席。朝日歌俳壇をたたえる。花も香も、見えざる花もある。二席。人間、孤独が基本。そう思えば怖いものなし。三席。「亀鳴く」も「田螺鳴く」も春。お先にどうぞと田螺。十句目。おこれる者は久しからず。万事、春の世の夢。

◆大串 章選

- 極寒のシベリアをいふ白寿かな (垂水市) 瀬角 龍平
- 湯豆腐の名句に偲ぶ万太郎 (西条市) 稲井 夏灯
- 鍵を手に鍵探しをり臍かな (大阪市) 眞砂 卓三
- 享保饗令和の饗と並びけり (福岡市) 釋 颯
- 朝日受け曙といふ椿咲く (熊谷市) 内野 修
- 異教徒の墓地に鶯鳴きにけり (さいたま市) 與語幸之助
- 佐保姫や子育て忘れ遊びをり (大和郡山市) 宮本 陶生
- 被災地の若き動きのあたたかし (町田市) 岩見 陸二
- 独り言小言に聞こゆ沈む花 (三鷹市) 宮野隆一郎
- この子らの三年前や卒業式 (高槻市) 若林真一郎

【評】第1句。第二次世界大戦後、多くのシベリア抑留者が過酷な労働を強いられ命を失った。第2句。「湯豆腐やいのちのはてのうすあかり」を思い久保田万太郎を偲ぶ。第3句。顔に眼鏡をかけて眼鏡を探す話など時どき聞かすが、「鍵を手に」とは！

短歌時評 戦争の歌を読む時は

小島 なお

黒木三千代が三十年ぶりの歌集『草の譜』を刊行した。ストーリーのやうなロシアの遣り口のいやだつて言ふのに、放してほしい。社会的な事柄をフェミニズムの思想に支えられた比喩や寓意によって捉える手法は、一九九四年刊行の前歌集『クウェート』から引き継がれているものだ。『クウェート』から引き継がれているもの。『クウェート』から引き継がれているもの。『クウェート』から引き継がれているもの。

『クウェート』収載の代表歌。発表当時は「女性がレイプという言葉を使うなんて」という批判も出たらしいが、この歌が訴えることの重要性が今こそ共有されるべきだろう。一九九〇年のイラクによるクウェート侵攻が領土(身体)への暴力のみならず、国家の歴史や矜持(精神)への暴力であることを詠う。「涸谷」は乾燥地帯において降雨時のみ水の流れる谷。「越えて」「まみる」の動詞にも昏い肉体が見えてくる。

歌集巻末には高野公彦が解説を寄せているのだが、「侵攻は〜」について別の新しい読みを加えて提示している。〈地図を見ると、ペルシア湾のいちばん奥に小さなクウェートの国がある。あたかも脚を広げた女性の、その陰部のやうにも見えるクウェート。「レイプ」と言つたのは、さうした地図的連想からではないだろうか〉

戦争の歌を読む時、私たちは戦地の惨状に心を痛め、感情先行の読みをしてしまいがちだ。けれど、そうした歌こそ同情に流されるばかりでなく、慎重かつ冷静な多角的解釈が必要だろう。(歌人)

記者サロン「木下龍也さん×A1」短歌 あなたのために詠む短歌」歌人の木下龍也さんと木下さんの歌集を学習したA1が参加者から募るお題をもとに歌を詠み、創作について語るイベントを4月26日午後7時から朝日新聞東京本社で開きます。会場参加とお題の締め切りは4日。定員150人。5月3日からオンラインでも視聴可能。申し込みはQRコードから。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほかき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。